

視覚刺激により認知機能が改善した認知症高齢者の一事例

～家族写真が認知症高齢者の気持ちに及ぼす効果～

神田 若菜、西崎 智津子

医療法人聖志会 渡辺病院 D3 病棟

【目的】 施設で生活する認知症高齢者の楽しみの一つに親しい人との面会がある。流石らは、「家族等の面会」に生きがいを感じている高齢者は多く、それは QOL に関与するとした。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響以降、面会制限を設ける施設が多くなり、石井らは、その後施設入所者の認知機能が低下したと報告した。

一方、吉原らは、オンライン面会による視聴覚刺激が、施設入所者へ良好な影響を及ぼしたと報告した。

今回、意欲低下を認めた認知症高齢者の日常生活に家族写真の閲覧を取り入れたところ、意欲向上とともに認知機能改善がみられたため、その一例について報告する。

【倫理的配慮】 本研究の発表に際し、個人が特定されないように配慮し、家族及び施設管理者の許可を得た。

【対象】 A 氏、80 代、女性。アルツハイマー型認知症、うつ状態。X-7 年頃より見当識障害と記銘力障害が出現。X 年施設入所したが、意欲低下がみられ ADL 全介助とな

り同年当院入院、その後も同状態が続いた。

HDS-R1 点。障害高齢者の日常生活自立度 B1、認知症
高齢者の日常生活自立度 M、

【方法】家族写真を A4 サイズで作成して、写真を見ながら食事をしたり、歩行器や車椅子に貼り付けて歩行練習を行い日常生活の変化を観察した。

【結果】写真閲覧前は、食事の自己摂取意欲が乏しく全介助を要していたが、写真閲覧後は、自らスプーンを手にとって全量自己摂取できるようになった。歩行練習中も意欲を持った言動がみられ、車椅子から歩行器歩行に移行した。笑顔が増えて、
他者との交流や作業療法にも積極性がみられるようになった。HDS-R は 4 点へ上昇した。

【考察】今回、家族写真閲覧前後で明らかに、食事の自己摂取量、歩行状態、発言内容、表情に変化がみられたことは、吉原らが報告した視聴覚刺激ではなく、視覚刺激のみでも、意欲向上と認知機能改善をもたらす可能性が示唆された。

文字数：773 文字（スペース含む）